

## 第4章 旅の足跡

彦九郎は、27歳から47歳で自刃するまで、21年間にわたる膨大な日記を残しています。

日記に記された旅先は、蝦夷地（北海道）・四国を除くほぼ全国に及んでいます。日記は紀行文を中心に、その土地の里談・自然災害・うちこわし・物価騰貴・飢饉などの社会状況、および外国船来航・蝦夷クナシリの反乱・棄捐令・寛政異学の禁などの政治状況の風聞や、土地柄による忠義・孝行・節婦などの伝聞、さらには多くの知人との交流の種々が記されています。中でも、公家・諸藩士・文人・学者のほか、土地のあらゆる階層の人々との交流関係を持っていることが特筆されます。

彦九郎の旅は情報のネットワークを作り出したことに大きな意義があり、知識人と名もない民衆との情報の伝達媒介者として、知識情報を全国的に拡散・普及させる役割を果たしました。

現在、私たちは彦九郎の残した日記から、18世紀後半（江戸時代中ごろ）の民俗や社会意識の動向などを知ることができます。